# 域外漢籍研究の新たなる展開

大渕　貴之

**陳正宏著**
**東亜漢籍版本学初探**

**B5判　290頁**
**中西書局**
**［本体7040円＋税］**

一九八〇年代に端を発する域外漢籍研究は、今世紀に入ってからの目覚ましい進展に伴い、もはやかつてのように「域外漢籍」と鉤括弧を附加して表記する必要もないほどの認知度を斯界に得たと言える。域外漢籍研究所を擁する南京大学文学院の張伯偉教授主編により『域外漢籍研究集刊』（中華書局、二〇〇五年創刊）や『域外漢籍研究叢書』（中華書局、二〇〇七年第一輯）の刊行が続き、毎年数多くの論考が世に問われているほか、陸続と出版される一大叢書『域外漢籍珍本文庫』（同文庫編纂出版委員会編、西南師範大学出版社、人民出版社、二〇〇八年第一輯）には、世界規模で蒐集された漢籍が収載される。文学研究の方でも、例えば静永健氏の近著『唐詩推敲』（研文出版、二〇一二年）副題に「唐詩研究のための四つの視点」とあり、「音声」、「典故」、「校勘」と並んで「域外」が取り上げられる等、域外漢籍研究の重要性、有効性に対する認識の高まりが窺える。

いまここに取り上げる陳正宏氏著『東亜漢籍版本学初探』（中西書局、二〇一四年）もまた、右に述べた趨勢のなか世に送り出された一書と言えそうではあるが、その実本書は従来の域外漢籍研究とは一線を画す。中国文献学、版本学の大家である陳氏ならではの視点で従来の域外漢籍研究にはなかった新たな方法論を提起し、それに基づく精緻な研究の実例を収録したのが本書である。以下に本書目録を引用する。なお、各篇に章番号は附されておらず、評者が便宜的に加えた（以下、○章と表記する）。

序　［韓］金文京

1　東亜漢籍版本学序説――以印本為中心

2 東亜漢籍印本鑑定概説
3 雕版研究在東亜漢籍版本学中的地位和作用
——以所見中日漢籍書版的比較為中心
4 宋本書根字縦題雑考
5 従写様到紅印——《豫恕堂叢書》中所見的晩清書籍初刻試印程序及相関史料
6 従単刻到全集：被粉飾的才子文本
——《双柳軒詩文集》、《袁枚全集》校読札記
7 東亜出版文化中越南本漢籍的意義
——以両種日本蔵越南本為例
8 越南漢籍裏的中国代刻本
9 朝鮮本与明清内府本——以印本的字体和色彩為中心
10 琉球本与福建本——以《二十四孝》、《童子摭談》為例
11 日本慶應大学図書館蔵朝鮮銅活字本《史記》初探
12 中国早期金属活字印本散考
——以三種明弘治間無錫華氏会通館印本為中心
13 乾隆庚戌辛亥朝鮮燕貿活字考——兼探朝鮮著名活字〝生生字〟及《生生字譜》之来源
14 紅与黒：漢籍套印本裏的穿插之美
15 京都所得《芥舟学画編》套印書版零片考
16 套印与評点関係之再検討
——以幾種東亜漢籍双色印評点本為例
附録：琉球故地訪書記
論文初出、外訳及増訂情況一覧
跋

冒頭の1～3章が総説に該当し、4章以降に個別具体的な研究事例が並ぶ。

従来の研究が対象とした「域外漢籍」には、①中国で書写・印刷され、後に中国域外に持ち出されて伝存する中国典籍、②中国域外の国や地域で書写・印刷された中国典籍、③中国域外の国や地域の人物が漢文を以て独自に撰述し、書写・印刷された典籍、以上の三類型が含まれる。陳氏はこの捉え方を批判的に吟味し、右記類型のうち、①に相当する諸典籍を域外漢籍には含めず、③を中心に②を含めた範囲を以て域外漢籍と定義する。その上で、極力「域外漢籍」の用語には慎重であるべきと主張し、書写・印刷が行なわれた国や地域の名称を冠した「○○漢籍」「○○本」の呼称（「中国本」「朝鮮本（高麗本）」「越南本（安南本）」「琉球本」「日本本（和刻本）」）や、中国典籍を含む総体としての「東亜漢籍」という新たな用語、すなわち概念を提案する。これは、評者なりに解釈すれば、中国を中心に東アジアの各地域に伝播した漢籍文化を書籍の移動（受容）という層次での分析のみにとどまらず、各地域

或いは東アジア全体に於ける漢籍の撰述・書写・出版という、より積極的な営みの層次で分析すべきことを主張してのことと見受けられる。この一点のみによっても、本書が域外漢籍研究に新生面を開くものであることは、明白であろう。

従来多くの研究が為される類型①について陳氏は、「域外所蔵中国古籍」等の呼称を与えるのが適切であると主張し、その背景として「代刻本」の存在を挙げる。8章には、越南文人撰述の漢籍が広東で刊刻（「代刻」）された事例が考察され、10章では同様の「福州刻琉球本」の事例が取り上げられる。撰述者や刊行主体に焦点を当てれば越南本、琉球本と称すべき一方で、印刷者（印刷地）に従えば中国典籍と言い得る事象が存在することを明らかにする。域外漢籍という呼称に慎重であるべきとする所以の一つである。

また、この代刻本を考察する上でも重要となる概念として「小交流圏」の新概念が提起される。国境を跨いだ一定範囲で行なわれた地域間交流の枠組みを意味し、小交流圏内に於ける各地の漢籍版本の相似性は、同一国内の遠距離地域間のそれを遥に上回るものであることが説明される。従来の域外漢籍研究にはなかった新たな視点の提供である。経済活動の一環としての出版でもあれば、史学分野に於いても注目されるべき指摘であろう。

従前の「域外漢籍」の概念に再考を加え、「東亜漢籍」及びその他の各地域の漢籍に対する用語を整理し、「小交流圏」という分析・研究のための新概念を提出したのが、本書の理論面での成果である。1～3章及び先述の8、10章を中心に詳しく述べられる。この他の諸篇に於いては、東亜漢籍全体或いは東亜漢籍に包含される各地漢籍の幾つかを同時に視野に入れた版本学的考察が行なわれる。各篇の内容を逐一紹介することはできないが（大凡については前引の目録を参照願いたい）、本書の全篇を通じて以下の特徴が看取される。

まず、通説や従来の常識に捕らわれない点である。先述の域外漢籍の概念問題も既にそうであったが、常識と錯覚して問いもしない論点や気にも留めない事象を見出し、丹念な考察及び説明が為される。2章に於いて各地漢籍の特徴を概説する際、中国古籍そのものの特徴を問い直すほか、3章では版本学が、版木を研究対象とすることの少ないことに疑問を呈し、5章では研究対象たる版本が如何なる作業工程を経て完成するのかを明らかにする。また、9章では明代の朝鮮本に明代流行の書体が見えないことを問い、解明する。14～16章の套印本（重ね刷りによる多色版）に関する一連の研究に於いても、文学作品に対する評点活動が多色刷り創始の契機になったという通説に対し、出発点はそうであったとしてもそ

の後の套印本と文学評点との間の希薄な関係性を浮き彫りにし、套印本の色刷り部分が持つ記号性について新たな見解を提示する。何れの論考も問題提起自体が面白く、専門分野が異なる院生学生諸氏に対しても、研究テーマの立て方を学ぶという意味合いで一読を勧めたい。

もう一つの特徴は、必ず研究対象となる漢籍や版木等を実見した上で考察を行なう点である。4章の宋本書根に記された書名、巻冊次が縦書きである理由を考察する一篇等は、宋本そのものを手に取り研究することがなければ、書根を目にし、疑問を持つことさえ叶わないであろう（本章では世界各国で陳氏が実見、調査した越南本の書根も考究の鍵となる）。陳氏の実物に基づいた手堅い研究姿勢は、その考証過程を読者諸氏に伝える際にも遺憾なく発揮される。本書の論証に於いては、圧倒的多数のカラー図版が挿入され、その鮮明さを期すため刊行にあたっては厚手で平滑な上質紙が使用される。この図版の多さも相俟って、本書は東アジア地域の版本学に関する事典としても機能しそうである。

評者は大学院生のころ、幾度か陳氏に接する機会を得、研究の話を伺ったのであるが、学問は新しい領域やテーマを開拓することが最も楽しく且つ意義深いこと、版本研究に当たっては必ず現物を目睹し、可能であれば触れること、そういった言葉が記憶に残る。本書はまさにその言葉通りであることをつくづく感じた。また、本書の到る処に世界各国の研究機関や研究者個人に対する謝意が直接的或いは間接的に示されるほか、注記には陳氏が指導される学生の研究成果が取り上げられることもあり、文辞には激励のニュアンスも漂う。義理堅く情に厚いお人柄を懐かしくも感じた次第である。

最後に蛇足ながら、これから本書をお読みになる読者に申し上げるとすれば、本書は「東亜漢籍版本学」という新しい研究分野（手法）の提唱に始まり、従前の域外漢籍研究との関係性については必ずしも明確に述べられている訳ではない。本稿及び本タイトルに見えるような位置付け方は、あくまで評者の見解である。また、5章（七九頁）に「特殊計数形式」として手書きの図版とともに帰納的に解説される記号は、蘇州号碼（蘇州碼）と通称され、Unicode にも割り当てがあるようである。何かの参考になれば幸いである。

（おおぶち・たかゆき　鹿児島大学）